

菊池一族の首級くびきゆう

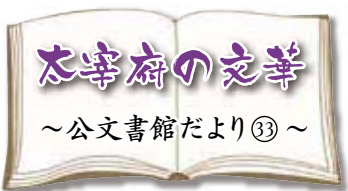
昭和53（1978）年8月、福岡市営地下鉄敷設のための御供所町の発掘現場から、人の首の骨110個が出土しました。14世紀前半のものと鑑定されたこれらの人骨は、そのほとんどが首から上の骨で、大部分が成人男性のもの。骨には合戦の証拠となる刀傷もあることが分かり、鎌倉時代最末期に鎮西探題（鎌倉幕府の九州出先機関）へ反乱を起こし鎮圧された菊池武時とその一族のものであるとして、発見当時、大いに注目を浴びました。

菊池武時の乱は、後醍醐天皇皇子護良親王の幕府追討命令に呼応し、元弘3（1333）年3月13日、肥後国御家人菊池武時が起こした反乱です。当初、九州御家人の中心的存在であった、少弐貞経、大友貞宗も菊池

氏とともに探題を襲撃する予定でしたが、時期尚早と判断したためかいずれもこれに応じず、菊池氏は結局単独で襲撃するに至ります。この約2カ月後の5月25日には、少弐・大友両氏が中心となって探題を滅ぼしますので、皮肉な結果というほかありません。

博多の街に火を放ち、櫛田神社近くにあった探題館に打ち入った菊池氏に軍勢でしたが、多勢に無勢、武時をば

じめ主だった人々は討ち死にし、その首級は犬射馬場という場所でさらされました（「博多日記」）。発掘調査で見された首級には火にかけられた痕跡が残っていました。甲冑のために焼かれたものと推測されています。ところで、この首級に関して次のような話が残されています。



合戦後の4月4日、犬射馬場の首級を見た女性が物狂いの状態になった。二人の僧がこれを怪しんで事情を尋ねてみると、この女性は男の風情をして、「私は菊池武時の甥の左衛門三郎というものである。童名を菊一といい、有智山で稚児をしていた。菊池で新妻を迎えてたった16日で出陣となった。」として、涙ながらにさまざまな恨み言を語った。僧らは「弱い女性のもとに出てくるのは筋違である。家を作って進ぜよう。」と言って卒塔婆に名字を記し松原に立ててやった。（「博多日記」）

戦乱で若くして死なねばならず、さぞ心残りであったであろう悲しみをよく伝えているエピソードです。

太宰府市公文書館 朱雀 信城